

写真 39 S F04 トレンチ⑱完掘 (真上より)



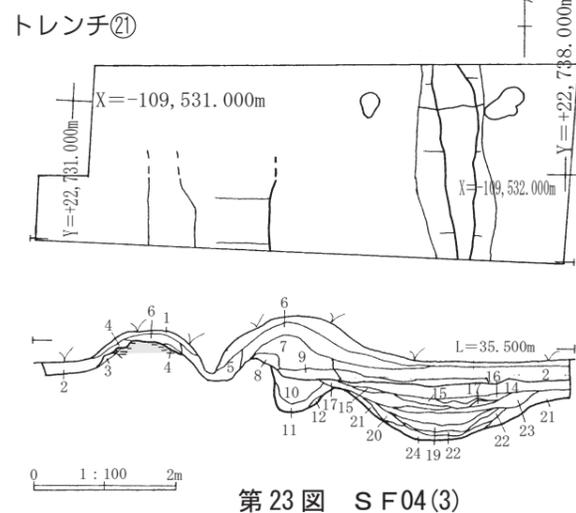
写真 40 S F04 トレンチ⑳完掘 (1) (南西より)



写真 41 S F04 トレンチ⑳完掘 (2) (北東より)



写真 42 S F04 トレンチ㉑完掘 (北より)



土層注記 A

- 1 I層
- 2 II層
- 3 V層
- 4 10YR3/3 暗褐色土 黒褐色土が少量、地山ブロック 20%混入 炭化物を少量含む しまりややあり 築地崩壊層
- 5 攪乱(水田の導水溝か)
- 6 10YR3/3 暗褐色土 炭化物を少量含む しまりなし 大小の礫が多量混入
- 7 10YR4/3 にぶい黄褐色土 地山ブロックが 10%混入 炭化物を少量含む しまりややあり
- 8 10YR3/4 暗褐色土 地山ブロックが 20%混入 炭化物を少量含む しまりややあり
- 9 10YR4/2 灰黄褐色土 炭化物を少量含む しまりあり 古い水田の畦畔か
- 10 10YR4/3 にぶい黄褐色土 地山ブロックが 30%混入 炭化物を少量含む しまりあり SD12 埋土
- 11 10YR3/3 暗褐色土 地山ブロックが 20%混入 炭化物を少量含む しまりあり SD12 埋土
- 12 10YR3/3 暗褐色土 地山ブロックが 30%混入 炭化物を少量含む しまりあり
- 13 10YR4/2 灰黄褐色土 黒褐色土・地山ブロックが少量混入 炭化物を少量含む しまりあり
- 14 10YR4/2 灰黄褐色土 地山ブロックが微量混入 炭化物を少量含む しまりあり SD04b 埋土
- 15 10YR5/4 にぶい黄褐色土 地山ブロックが少量混入 炭化物を少量含む しまりあり SD04b 埋土
- 16 10YR4/3 にぶい黄褐色土 地山ブロックが微量混入 炭化物を少量含む しまりあり SD04b 埋土
- 17 10YR4/3 にぶい黄褐色土 地山ブロックが微量混入 炭化物を少量含む しまりあり SD04b 埋土
- 18 10YR3/2 黒褐色土 地山ブロックが少量混入 炭化物を多量に含む しまりあり 粘性あり SD04b 埋土
- 19 10YR2/1 黒色土 地山ブロックが 10%混入 炭化物を多量に含む しまりあり SD04b 埋土
- 20 10YR4/3 にぶい黄褐色土 地山ブロックが微量混入 炭化物を少量含む しまりあり SD04b 埋土
- 21 10YR5/4 にぶい黄褐色土 地山ブロック砂質土が少量混入 炭化物を少量含む しまりあり SD04b 埋土
- 22 2.5Y 暗灰黄色土 地山ブロック・黒褐色土が少量混入 炭化物を多量に含む しまり・粘性あり SD04b 埋土
- 23 10YR3/1 黒褐色土 地山ブロックが少量混入 炭化物を多量に含む しまり・粘性あり SD04b 埋土
- 24 10YR4/2 灰黄褐色土 地山ブロックが 50%混入 炭化物を多量に含む しまり・粘性あり SD04b 埋土

(3) 堀跡

S F01・02・04築地堀跡の外側(それぞれ北・東・西側)は、水田との間に未利用の土地が帯状に広がっている。S D01~04堀跡は、おおむねこの地下に埋蔵されている。なおこの帯状の部分は、かつては築地堀跡の際まで水田だったものを、1970年代に遺跡周辺で実施されたほ場整備に伴って旧衣川村がその一部を公有化した部分であり、これがかつての土地区割りだったわけではない。S D01~04堀跡を対象とした調査は、第1・2・6・8・10~13・次調査である。いずれも、小面積のトレンチ内で検出し、そこにサブトレンチを設け、断ち割りをして堆積状況を確認したのみで、面的に広げた調査ではない。また、南辺のS D03堀跡だが、これまでの調査ではS F03築地堀跡の南側は湿地上になっていることが確認されていることから、存在しなかった可能性もある。堀跡の両端を検出できたトレンチに限ってその規模を示せば第3表の通りとなる(なお、図は築地堀跡とあわせて第15~18・21~23図に示した)。地点によって大きさに幅があるが、これは前述のように当該部分が近年まで水田として利用されていて、耕作によって削平を受けたためと考えられ、本来は同じような規模だったと推測される。したがって、最も遺存状況のよいS D04堀跡・トレンチ⑱の規模が原状に近いものと考えられる。このように、堀跡は地点によって遺存状況が異なるため、築地堀跡との距離も場所によって違う。最も遺存状況がよいトレンチ㉑では、築地堀跡の外側と堀跡の内側との距離は2.06mである。他の辺もおおむね2.00m前後離れていたものと推測されよう。

S D01・02・04堀跡は途中で途切れているが、この部分のすぐ内側のS F01・02・04築地堀跡も途切れているので、この部分で築地堀の内と外とを行き来できるように土橋状にしたものと考えられる。その長さは、全体を検出したS D01堀跡では3.75mとなっている。

	トレンチ番号	上幅	下幅	深さ
S D01	③	2.26m	1.28m	0.22m
S D02	⑧	1.84m	1.08m	0.13m
S D02	⑨	1.45m	—	—
S D04	⑩	1.88m	0.76m	0.50m
S D04	⑱	3.13m	0.68m	0.69m

第 4 表 堀跡規模一覧

各次調査で確認した堆積状況を見ると、いずれも自然堆積で、徐々に埋没していったことが見てとれる。なお、第12次調査ではSD04の堆積土に含まれる花粉化石と大型植物化石の分析を行った。それによれば底面近くの堆積土には花粉は多く含まれず、堀内部は乾燥した環境だったと推測されている。したがって、SD01・02・04堀跡には常時水が湛えられていない状態だったと推測される。また、寺院廃絶後に堆積したと見られる上部の堆積土にはイネ科やミソハギ属の花粉が多く検出されていて、草本が多く繁茂する湿地であったと推定されている。



写真43 SF04・SD04の位置関係（北東より） 写真44 SD04トレンチ⑳断面（北より）

(4) 溝跡

9条の溝跡が検出された。検出位置や規模などは第4表にまとめた。いずれも全形を把握できたものではなく、具体的な機能や性格が判明したものはない。

遺構番号	次数	位置	方位	規模 (m)			断面形状	堆積状況	遺物の有無	時期
				検出長	幅	深さ				
SD05	6	SB02の北	N-10° -E	13.60	0.50	0.05	皿状	自然堆積	×	不明
SD06	6	SB02の北	N-10° -E	3.07	0.50	0.03	皿状	自然堆積	×	不明
SD07	6	SB01の西		13.00	0.30	0.10	逆台形	自然堆積	×	不明
SD08	8	SF04を切る	N-148° -E	7.70	1.70	0.70	逆台形	自然堆積	×	不明
SD09	8	SX01を切る	N-99° -E	5.90	0.30	0.90	U字状	自然堆積	×	攪乱か？
SD10	8	SX01を切る	N-96° -E	6.80	0.50	0.20	逆台形	自然堆積	×	攪乱か？
SD11	8	SX01を切る	N-99° -E	6.60	1.20	0.44	逆台形	自然→人為	×	攪乱か？
SD12	10・12	SF04の西	N-6° -E	43.40	1.30	0.60	皿状	自然→人為	×	建物群以前
SD13	12	SF01の北	N-51° -E	3.00	1.10	-	-	-	-	攪乱か？

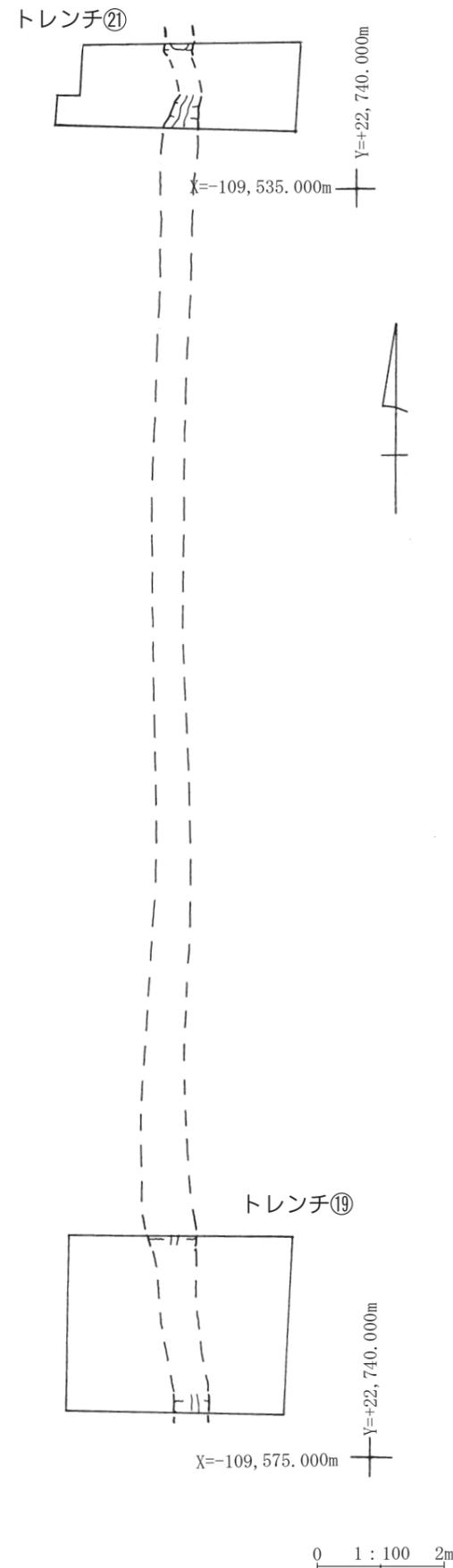
第5表 溝跡一覧表

(5) 土坑

6個の土坑が検出された。検出位置や規模などは第3表にまとめた。ほとんどで全形を把握・精査しているが、具体的な機能や性格が判明したものはない。

遺構番号	次数	位置	規模 (m)			断面形状	堆積状況	遺物の有無	時期
			長さ	幅	深さ				
SK01	6	SB03の北東	1.35	0.83	0.18	皿状	水平	○	建物群前
SK02	6	SB01の西	1.05	0.45	0.12	皿状	レンズ状	×	建物群前
SK03	8	SX01の北	1.80	0.60	0.50	V字状	レンズ状	×	建物群前
SK04	11	SF01の直下	1.35	1.30	0.23	皿状	単層	×	建物群前
SK05	13	SB01の基壇中	1.19	0.85	0.12	皿状	単層	×	建物群
SK06	14	SB02の基壇下	1.50	1.34	0.50	U字状	不明	不明	建物群前

第6表 土坑一覧表



第24図 SK01



写真45 SD06完掘（南より）



写真46 SD05完掘（南東より）



写真47 SD12トレンチ㉑断面（北より）

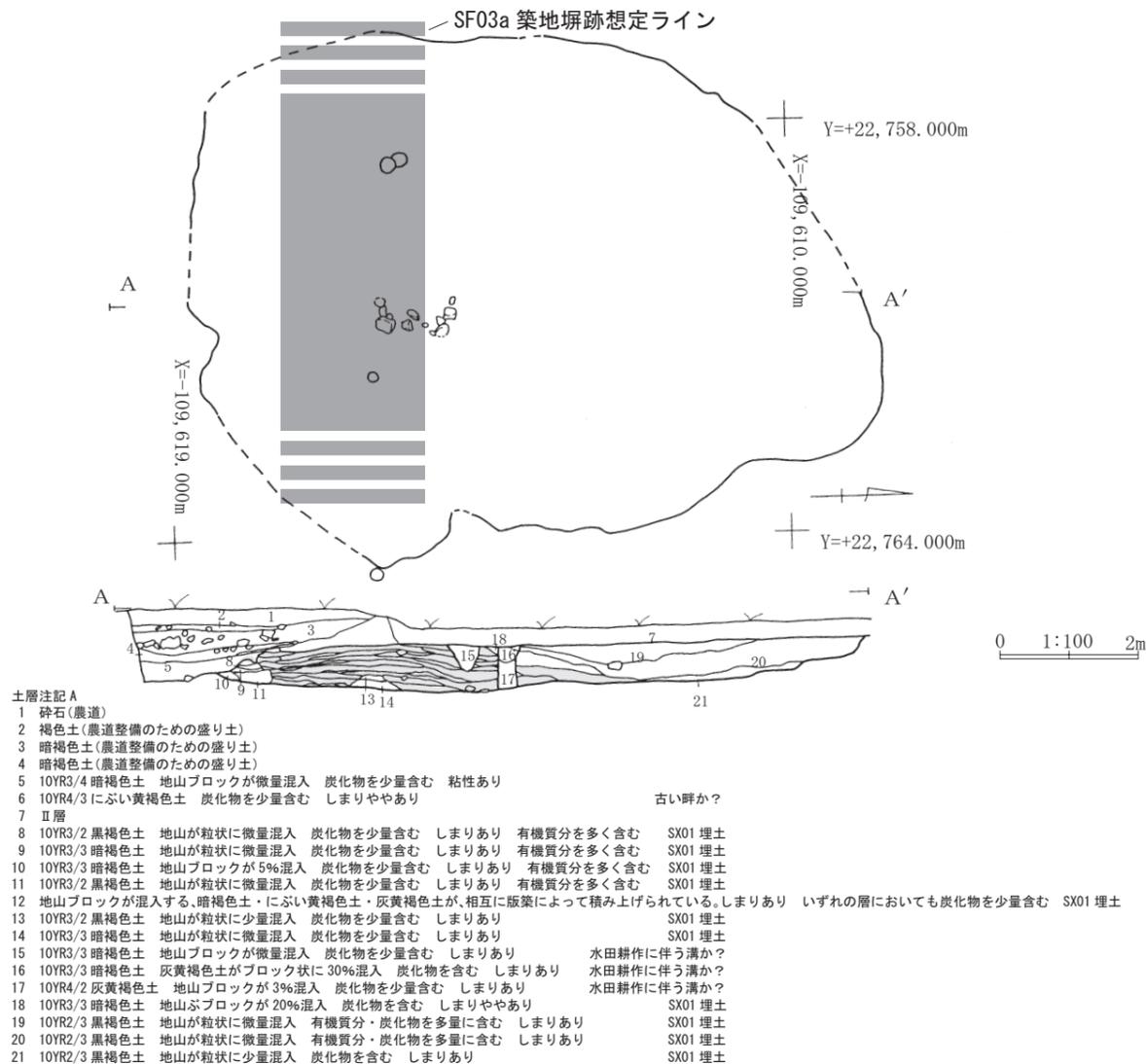


写真48 SK01断面（西より）

(6) 性格不明遺構

① S X01 土坑状遺構

調査履歴 第8・13次調査において調査した。**位置と概要** S F03b 築地塀跡のほぼ中央において検出された。当該部分のS F03b 築地塀跡が削平されているため、直接的な重複関係は確認できていない。ただ、S X01 土坑状遺構が、想定されるS F03b 築地塀跡の底面より低い位置で検出されていること、後述のように人為的に埋め戻されていることから、S F03b 築地塀跡が構築される以前の遺構と判断した。**規模と形状** 平面形はややゆがんだ楕円形を呈しており、規模は長軸 10.58m・短軸 8.08m・深さ 0.57mを測る。**堆積土** 大きく3つに分かれる。ひとつは中央部の地山ブロックを含む厚さ 5～15cm の暗褐色土が水平に幾層にもわたって堆積している部分で、他のふたつはその南北に黒褐色土・暗褐色土がレンズ状に堆積している部分である。版築作業によって人為的に埋め戻された後、あまり間をおかず徐々に埋没していったと判断できる。**遺物** 土師器が埋土全体から出土している。これらのほとんどは破片の状態で出土していて、底部から口縁部まで復元できた個体は■点しかない。また、出土したもののうち9割以上が底部の破片であるのが特徴的である。詳細については第3節を参照のこと。**時期** 寺院造営直前まで開口していたことは確実で、掘削がいつかは不明だが、それほど遡らないものと推測される。



第25図 S X01



写真49 S X01 検出状況(北より)



写真50 S X01 完掘(北より)



写真51 S X01 断面(1)(北東より)



写真52 S X01 断面(2)(北東より)



写真53 S X01 遺物出土状況(1)(南より)



写真54 S X01 遺物出土状況(2)(南より)

(7) その他の遺構

① 遺物包含層

調査履歴 第6次調査において調査した。報告書で「南東隅黒色包含層」とされているものである。

位置と概要 築地塀内部南東隅で検出された最大層厚 20cm の黒褐色土層である。S F04a 築地塀跡